

巻頭言 ー主体的・対話的で深い学びの足元ー

吉本剛典

これまで、学部と大学院の授業やゼミをはじめ、本学の教員養成スタンダード運営室や教職キャリア開発センターでも、多くの学生たちと接することがありました。大学教育の場で、学生たちが主体的に（自ら意識して）よく学ぼうとしているようだと感じられた場面を、主として授業中の言動から拾ってみました。要するに、何故自分が（態々）参列して（渋々）話を聞いているのか、ちゃんと分かっている人の様子です。

以下の中でも基本的なことが言わないとできない、言ってもできないのは、何故自分がその時その場に居るのか、ちんぷんかんぷん（此処は何処、私は誰状態）（自己の存在否定）に違いありません。本人の元々の資質能力のような気もしますが、そこに主体的・対話的で深い学びの今日的意義と非常に困難が横たわっているようにも思います。

1. 授業やゼミで説明した知識や技術について、学生が自分で考えて、正しく理解し、自分のものとしてくれたとき

地図を作成する課題において「方位を示すには南北に長い直線と東西に短い直線を直交させる」と説明し、「定規を用いて」とまでは手取り足取り指示しない。多くの学生は平気で出鱈目に手描きするが、何人かは、定規やペンケースなどの直線部分を利用して、あるいはフリーハンドで正しく「直線」を描いてくれる。当たり前といえば当たり前だが、学生が自分で考えて、課題の意図を正しく理解し、些細なことでも達成してくれたとき、主体的と判断される。残念ながら、そのような学生は減少の一途だ。

2. 授業やゼミで説明した知識や技術について、学生が自分で二つ以上の事項を組み合わせ、正しく理解してくれたとき

同じく地図を作成する課題において、たとえば、各領域内の人口を円の大きさに表現する地図を「点」の地図（線の地図、面の地図に対して）と分類する。続いて、「点」の地図は文字どおり位置が大切で決定的な意味をもつ（線の地図は長さ、面の地図は面積）ことを説明する。人口を示す円の中心を各領域の図心に合わせることを期待しているのだが、多くの学生は、引き出し線などのノイズ図形を付加して円の位置を出鱈目にずらしてしまう。つまり横着しているのであるが、それにしても、見え見えのブービートラップに、お約束のように、素直に引っ掛かってくれる。少しは考えただろう。しかし、恐ろしく薄っぺらい。二つの要件（円の大きさに表現することと「点」の地図は位置が大切で決定的な意味をもつこと）を組み合わせ、正しく理解し、課題の意図を凌駕してくれると、主体的と判断される。残念ながら、そのような学生はごく僅か、絶滅危惧種に近い。

3. 他の授業で習得した知識や技術を私の授業やゼミでも活用、応用してくれたとき

たとえば、「地図と言えば国土地理院」「統計と言えば総務省統計局」という金科玉条を学生の脳裏に叩き込んでくれる授業がある。学生がそのことを自家薬籠中のものとし、私の授業やゼミでも活用、応用してくれたとき、主体的と判断される。

4. 授業やゼミ中に、私の話す内容に沿って、学生がノートを取ってくれているとき

授業やゼミ中の私の話を雑談と勘違いして聞き流す学生もいるが、多くの学生は重要語

(術語, 専門用語, キーワード)を記録し, 頭の中で関連づけながら, 自分のノートに整理してくれる。人の話を聞くとき, ましてや授業やゼミにて, ノートを取り, 記録するのは当たり前のことと思うが, 言わないとできない, あるいは言ってもできない学生もいることには驚愕する。そのような学生は授業やゼミにも自分の学習にも後ずさりして引いているので, 本人の知識や技術は可哀想に, いつまでも薄っぺらいままだ。一体, 何のために授業やゼミに参列しているのやら。小さい頃から, 学校の教師に言われたことを言われたとおり, 言われただけやり過ごしてきたことによって, 自分で考えて理解し判断する回路が退化してしまったのかしらん。したがって, 当たり前前にノートを取っているだけで, 学習の成果が期待されるので, 主体的と判断される。

5. 演習の成果をまとめて発表する際, 自分の学習の成果をベースにして, 他の学生にも分かり, 役に立つような資料を作ってきてくれたとき

演習を積み重ねると, 自分が分かったことを確実にし, 次のステップの足場にする事ができる。その際, 一人の学生のまとめた事柄が図らずも他の学生にも役に立つことが多い。他人が見ても分かるようにまとめるには, 自分で相当に理解し, 思案して表現や構成を練磨しなければならず, そのようなプロセスは主体的と判断される。また, 他人への気遣い, 心配りも垣間見え, 周りのことによく気がつくことは賞賛に値する。意識, 無意識にかかわらず, 自分の言動を第三者の目で客観的に観察, 評価できることは優れた資質と言える。

6. テーマを設定した討論において, 自分以外の発言内容を踏まえつつ, また議論の収束と発散の頃合いを推量しながら, 自分の発言をしてくれるとき

たとえば, 都市・農村地域の景観と機能, 特性や推移について議論するとしよう。学生たちは前時までに, 関連する基礎的知識, 見方・考え方を習得し, 議論に参加できるだけの一定の水準に到達している(はずだ)。中には, 最低1回, 何でもいから発言しときゃいんでしょっ, そうすりゃこの授業, 出席になりますよねってな調子で, 残念な学生も時々いる。学生がテーマについて自分で考え, それまでの学習の成果を総動員して, 自分の発言を(しよう)としてくれるとき, 主体的と判断される。そのような技量は, 学生の知識や技術の習得の蓄積, 人間的成長およびトレーニング(練習)によって向上する。付け焼刃に終らないことを祈る。

7. 授業中, 学生がスマホを取り出していないとき

今日びのこと, ゲームやSNSだけでなく, 私が授業で紹介したこと(の一部)をネット検索したり, 板書をデジカメ機能で撮ったりするのに, 授業中にスマホを弄る学生も少数いる。授業中スマホは学生の勝手(自己責任)と私は思っているので, 特に咎めたりはしない。(ただし音を立てると, 微細なクリック音, シャッター音でも, 授業の妨害を意図する, 唾棄すべき邪魔者以外の何者でもない)ので, 即座に退出させる。別段, 叱ったりはしない。淡々と自業自得。)ところで, 私の圧迫を基調としたマシンガントークや刻々と変幻自在で縦横無尽な板書をスマホで何とかできよう筈もない。したがって, 今のところ, 授業中にスマホを取り出していないだけで, 自分で考えて学ぼうとする姿勢の現れに他ならず, 最低限の主体的と判断される。

8. 授業のある回を欠席した学生が, その回の内容を友人に教わるなどして自助努力したのであろう, 次回の授業で十分な水準に回復してくれていたとき

それぞれの授業では自分がどれだけ知識や技術を身につけるかが重要であり, 授業に出

席することはそのための前提条件に過ぎない。欠席した分を自分でフォロー（しようと）することは、学習の根本をわきまえていることを雄弁に物語るので、主体的と判断される。また、自分の欠席分を教わろうとする友人に負担を掛けることにもなるので、持ちつ持たれつ这个社会性を少しは認識もしていよう。頼りにされた友人としては、折角自分が習得した内容をわざわざ人に教えるのは厄介なことに違いないが、自分の復習、整理にもなり、よりよい理解に繋がると前向きに考えてほしいものだ。

9. 授業に出席していた学生が、当日の授業終了後や数日経った日に、キャンパス内で遭遇した際、まともな挨拶をしてくれたとき

日常的にまともな挨拶ができる学生が激減している中で、偶然私に出くわしたとき、私の授業（の一部）を想起したのだろう。遭遇時のまともな挨拶は、私の授業への手応え、自分の理解に対する自覚が頭の隅にあつてのことに違いない。また、咄嗟の接触機会にもかかわらず、瞬時に対応できるということは、日頃の覚醒、自分の学習への意識の高さを彷彿させる。まともな挨拶自体、それはそれとして主体的と言えようが、学生の主体的な学習の自覚がその行動に表出していると考えられる。

兵庫教育大学／大学院と地理学研究室のクロニクル

学部	入学年度	卒業年度	卒業年	3月
1期	1982 昭和57年	1985 昭和60年	1986	昭和61年
2期	1983 昭和58年	1986 昭和61年	1987	昭和62年
3期	1984 昭和59年	1987 昭和62年	1988	昭和63年
4期	1985 昭和60年	1988 昭和63年	1989	平成元年
5期	1986 昭和61年	1989 平成元年	1990	平成 2年
6期	1987 昭和62年	1990 平成 2年	1991	平成 3年
7期	1988 昭和63年	1991 平成 3年	1992	平成 4年
8期	1989 平成元年	1992 平成 4年	1993	平成 5年
9期	1990 平成 2年	1993 平成 5年	1994	平成 6年
10期	1991 平成 3年	1994 平成 6年	1995	平成 7年
11期	1992 平成 4年	1995 平成 7年	1996	平成 8年
12期	1993 平成 5年	1996 平成 8年	1997	平成 9年
13期	1994 平成 6年	1997 平成 9年	1998	平成10年
14期	1995 平成 7年	1998 平成10年	1999	平成11年
15期	1996 平成 8年	1999 平成11年	2000	平成12年
16期	1997 平成 9年	2000 平成12年	2001	平成13年
17期	1998 平成10年	2001 平成13年	2002	平成14年
18期	1999 平成11年	2002 平成14年	2003	平成15年
19期	2000 平成12年	2003 平成15年	2004	平成16年
20期	2001 平成13年	2004 平成16年	2005	平成17年
21期	2002 平成14年	2005 平成17年	2006	平成18年
22期	2003 平成15年	2006 平成18年	2007	平成19年
23期	2004 平成16年	2007 平成19年	2008	平成20年
24期	2005 平成17年	2008 平成20年	2009	平成21年
25期	2006 平成18年	2009 平成21年	2010	平成22年
26期	2007 平成19年	2010 平成22年	2011	平成23年
27期	2008 平成20年	2011 平成23年	2012	平成24年
28期	2009 平成21年	2012 平成24年	2013	平成25年
29期	2010 平成22年	2013 平成25年	2014	平成26年
30期	2011 平成23年	2014 平成26年	2015	平成27年
31期	2012 平成24年	2015 平成27年	2016	平成28年
32期	2013 平成25年	2016 平成28年	2017	平成29年
33期	2014 平成26年	2017 平成29年	2018	平成30年
34期	2015 平成27年	2018 平成30年	2019	平成31年
35期	2016 平成28年	2019 平成31年	2020	平成32年
36期	2017 平成29年	2020 平成32年	2021	平成33年
37期	2018 平成30年	2021 平成33年	2022	平成34年

大学院	入学年度		修了年度		修了年 3月	
1期	1980	昭和55年	1981	昭和56年	1982	昭和57年
2期	1981	昭和56年	1982	昭和57年	1983	昭和58年
3期	1982	昭和57年	1983	昭和58年	1984	昭和59年
4期	1983	昭和58年	1984	昭和59年	1985	昭和60年
5期	1984	昭和59年	1985	昭和60年	1986	昭和61年
6期	1985	昭和60年	1986	昭和61年	1987	昭和62年
7期	1986	昭和61年	1987	昭和62年	1988	昭和63年
8期	1987	昭和62年	1988	昭和63年	1989	平成元年
9期	1988	昭和63年	1989	平成元年	1990	平成 2年
10期	1989	平成元年	1990	平成 2年	1991	平成 3年
11期	1990	平成 2年	1991	平成 3年	1992	平成 4年
12期	1991	平成 3年	1992	平成 4年	1993	平成 5年
13期	1992	平成 4年	1993	平成 5年	1994	平成 6年
14期	1993	平成 5年	1994	平成 6年	1995	平成 7年
15期	1994	平成 6年	1995	平成 7年	1996	平成 8年
16期	1995	平成 7年	1996	平成 8年	1997	平成 9年
17期	1996	平成 8年	1997	平成 9年	1998	平成10年
18期	1997	平成 9年	1998	平成10年	1999	平成11年
19期	1998	平成10年	1999	平成11年	2000	平成12年
20期	1999	平成11年	2000	平成12年	2001	平成13年
21期	2000	平成12年	2001	平成13年	2002	平成14年
22期	2001	平成13年	2002	平成14年	2003	平成15年
23期	2002	平成14年	2003	平成15年	2004	平成16年
24期	2003	平成15年	2004	平成16年	2005	平成17年
25期	2004	平成16年	2005	平成17年	2006	平成18年
26期	2005	平成17年	2006	平成18年	2007	平成19年
27期	2006	平成18年	2007	平成19年	2008	平成20年
28期	2007	平成19年	2008	平成20年	2009	平成21年
29期	2008	平成20年	2009	平成21年	2010	平成22年
30期	2009	平成21年	2010	平成22年	2011	平成23年
31期	2010	平成22年	2011	平成23年	2012	平成24年
32期	2011	平成23年	2012	平成24年	2013	平成25年
33期	2012	平成24年	2013	平成25年	2014	平成26年
34期	2013	平成25年	2014	平成26年	2015	平成27年
35期	2014	平成26年	2015	平成27年	2016	平成28年
36期	2015	平成27年	2016	平成28年	2017	平成29年
37期	2016	平成28年	2017	平成29年	2018	平成30年
38期	2017	平成29年	2018	平成30年	2019	平成31年
39期	2018	平成30年	2019	平成31年	2020	平成32年

年度	地理学研究室教員	白井義彦	成瀬敏郎	藤井宏志	吉本剛典	南埜猛
1979	昭和54年	-----	10月			
1980	昭和55年					
1981	昭和56年	-----		----	4月	
1982	昭和57年	-----		----	4月	
1983	昭和58年	-----		----		----
1984	昭和59年					
1985	昭和60年					
1986	昭和61年					
1987	昭和62年					
1988	昭和63年					
1989	平成元年					
1990	平成 2年					
1991	平成 3年					
1992	平成 4年					
1993	平成 5年	1994	平成 6年3月			
1994	平成 6年					
1995	平成 7年	-----		----		----
1996	平成 8年					
1997	平成 9年					
1998	平成10年					
1999	平成11年	2000	平成12年	-----	----	3月
2000	平成12年					
2001	平成13年					
2002	平成14年					
2003	平成15年					
2004	平成16年					
2005	平成17年					
2006	平成18年					
2007	平成19年	2008	平成20年	-----	3月	
2008	平成20年					
2009	平成21年					
2010	平成22年					
2011	平成23年					
2012	平成24年					
2013	平成25年					
2014	平成26年					
2015	平成27年					
2016	平成28年					
2017	平成29年					
2018	平成30年	2019	平成31年	-----	3月	

吉本剛典ゼミ卒業研究（卒業論文）修士論文題目

行末尾に()のあるものは主たる指導教員, それに対し吉本は補助的に支援した。
姓は卒業/修了時のもの, その後変わった人もいる。

期	学部	卒業研究（卒業論文）
1	高木辰也	修正ウィーバー法による東海3県の農業地域区分に関する研究 （白井義彦）
3	清水真弓	ため池地帯の水管理—兵庫県稲美町入ヶ池郷土地改良区を例として— （白井義彦）
7	山本哲也	都市化の進展による農村集落の変化—兵庫県東播磨土地改良区域を例に —（白井義彦）
12	錦織慎也	兵庫県南部における鉄道交通網の整備と地域の変容
13	鈴木聡	兵庫県北部地域におけるスキー場の立地と地域観光
14	鎌倉淳	兵庫県における地域間交流とコミュニケーション空間の展開
14	萱原浩	兵庫県におけるスキー場の整備過程—千種スキー場を中心に—
14	中村太一	航空交通による地域間連結の現状と課題—北海道を中心として—
16	池田宏美	物語作品の想像空間と地理空間の再構成
16	栗原由利子	年齢別人口分布からみた兵庫県の地域特性
17	秋定辰昌	総合スポーツ施設の立地機能と整備計画—長野県菅平高原と神戸市し あわせの村—
17	杉山修平	地図検索システムの開発と利用環境の整備
18	赤木一成	高速バスによる都市間連結ネットワークの形成と変化
18	酒井頼子	都市近郊地域における憩い空間の創造—神戸市北部のレクリエーショ ン公園—
18	重内俊介	千種高原スキー場の立地と展開—西播磨北西部の観光開発と地域振興—
18	竹森伸二	鹿児島県離島の現状と課題—地域の自律と学校教育の持続性を探る—
19	福井奈菜	播磨地域における広域公園と近隣公園の立地と利用動向
20	岡田恵	京都の観光資源と巡回モデルコースの立案
21	小谷友紀	沖縄の風土と文化に基づいた観光の展開
21	藪田侑亮	日本の高速道路網の発達
22	伊藤友祐	都市内自動車交通の特性と課題—大阪の路上駐車を中心に—
22	元美香子	神戸市内の小学校の立地と児童数の変動に関する考察
25	市村真希	ライフステージからみた観光地の選好と観光行動の実際
25	藤田透	日本の野球場の立地とその地域展開
26	徳田章栄	デジタルカメラによる空間の認識と景観の記録
27	笠原ちなみ	修学旅行と個人旅行の経験と構成
27	池田悟	社会の中の正義（森秀樹）
28	大西智史	兵庫県のスキー・スノーボード場の立地展開とレクリエーション機能
29	高瀬悠一郎	新幹線と新幹線網の変遷と発達—ぼくの新幹線—
29	多田美咲	美術館と絵画芸術—大塚国際美術館の時間と空間—
29	柳田敬史	自然環境の中の人間と教育—沈黙の春からセンス・オブ・ワンダーへ—
29	山本里保	姫路市の小学校と地域学習
30	住元麻耶	神戸港をめぐる時間と空間—歴史的発展と地理的世界—
30	古谷彰梧	兵庫県播磨地域の古墳の現在

期	学部	卒業研究（卒業論文）
30	南和樹	兵庫県北播磨地域の飲食店の立地と学生の動向
31	北川淳也	鉄道駅の立地と周辺地域の変化—兵庫県姫路駅とはりま勝原駅に注目して—
31	鈴木孔明	社会の中の交通—自動車を中心として—
32	生友駿	アニメ作品の世界に見る地理空間の再現性—京都アニメーション『氷菓』と『けいおん』の分析—
32	春風直樹	鉄道と鉄道写真の展開—近現代の社会と個人の経験—
32	宮崎琴葉	旅から広がる世界の理解—南相馬からオーストラリアへ—
32	中川貴普	空想と現実の世界を巡るアニメのメディア展開
32	玉脇健太	山陰海岸ジオパークの実際とガイド活動の展開—兵庫県豊岡市に着目して—（南埜猛）
32	芝地素直	小中学校の防災・減災教育と溜池ハザードマップの利用—神戸市西区岩岡町を事例として—（南埜猛）
32	北野敬寛	東播磨地域の溜池に残された伝説—現代のフィールドワークからの観照—（南埜猛）
33	高見佳樹	土地の測量と社会の中の基準点—国土と歴史に対する理解を深めるために—
33	山路正志	日本の道路と自動車の現在—兵庫県の道路走行および自動車とミニカーの遠近望—
34	太江田美奈	熊本城を取り巻く熊本市の景観形成
34	草野なつみ	エトランジェールのヨーロッパツアーリズム
34	増本和希	長崎地方の地域資源と歴史遺産
34	目叶和希	神社の成り立ちを巡る散策—兵庫県神戸市を中心として—
期	大学院	修士論文
3	伊藤善文	神戸市域における市街地化の地理学的研究（白井義彦）
3	加藤正俊	溜池灌漑と水利秩序—兵庫県加西台地の溜池卓越地域を例として—（白井義彦）
3	刑部之康	但馬地方における酒造出稼ぎと地域農業の展開（上村恵一・白井義彦）
7	羽賀公彦	愛媛県銅山川の分水と地域の発展（白井義彦）
10	大谷正敏	都市化の進展と土地改良区への対応—兵庫県東播磨土地改良区を例にして—（白井義彦）
11	小河文雄	工業化の進展と河川水利の調整—兵庫県高砂市域を事例として—（白井義彦）
12	寒川忠俊	都市域の拡大と交通システムの変貌—京阪神都市圏を例として—（白井義彦）
12	白木智昭	公共サービスの地域的分配構造に関する実証的研究（増井幸夫・佐々木正道）
13	森泰三	都市域における人口高齢化の空間的組織（白井義彦）
—	沈光澤	モデル的アプローチの応用と概念探究学習モデル—高等学校の都市単元の授業設計—（岩田一彦）教員研修留学生
14	久保哲成	ダム建設と水利調整—加古川水系・川代ダム直下流域を対象として—（白井義彦）
14	内藤英一	兵庫県佐治川流域における水利調整の展開（白井義彦）

期	大学院	修士論文
14	藤野剛志	資源管理と人間環境系に関する地理学的研究—ブルース・ミッチェルの地理学と資源分析に基づいて— (白井義彦)
17	北智裕	市川流域における水利調整と流域管理
18	塩谷裕司	わが国島嶼空間の変容—架橋開通に伴う瀬戸内海中部, 田島・横島の地域変化を中心として—
18	吉柳義雄	福岡県筑豊地区における地域振興の現状—トヨタ自動車工場進出による地域の変容— (藤井宏志)
22	金崎正規	都市交通システムにおける路面電車/LRTの地理学的研究—日本とドイツおよび周辺国の現状考察と再評価—
22	濱本晃宏	地図生成プログラムにおける地図投影法の類型と選択可能性—小縮尺地図の変換機能を中心として—
23	香川定昭	愛知県の人人口分布および用水地域の空間分析
24	三原慎吾	日本における博物館の設置と活動の分析と展望—地域社会および学校教育との連携をめざして—
25	東大介	地域社会における少年犯罪の実態と分析—日本とくに大阪府の動向を中心として—
25	三田至充	兵庫県における高等学校の動向と関係地域の活性化—加古川下流部, 高砂市を中心とした分析と展望—
26	梁海山	中国内モンゴルの地域変化と都市形成に関する地理情報システム (GIS) 分析
27	藤尾智勝	地理分析とコンピュータ利用技術—開発環境とネットワーク・システム—
27	植原優子	韓国の映像世界にみる地理空間の再現性
27	齋藤達夫	兵庫県中野村 坪刈記録にみる稲収量と気候の関係 (成瀬敏郎)
30	陳長江	内モンゴルにおける観光地域に関する地理学的研究 (南埜猛)
31	馬撒仁マサリン	中国の農業生産と農産物の輸出入—内モンゴルの農地牧草地の保全のために—
31	金国花	中国雲南省の観光開発と地理的要因
31	歌唱	機械翻訳を利用したグローバルな交流のための書き換えルールの選択と適用—中国語の場合について— (長瀬久明)
32	吉田翔大	中学校社会科歴史的分野における思考力形成を意図する授業開発—歴史的価値判断型の授業モデルの事例をもとに— (中村哲)
32	安田博貴	高等学校日本史における伝統と文化に関する授業構成と授業開発—中世・近世の伝統と文化に関する授業事例を手がかりに— (中村哲)
33	胡日查必力格フリチャビリク	中国の退耕還林還草プロジェクトの計画と実際—内モンゴル奈曼旗を中心として—
—	マエマエ グレース ダカテイア	ソロモン諸島と日本の環境教育 (教員研修留学生)
35	横矢咲穂	中等歴史教育におけるメタヒストリー学習の理論と方法 (原田智仁)
36	半田有哉	桜に関わる日本の自然と文化—地理学による桜の美しさの探究— (南埜猛)
36	石井瑛之	再生可能エネルギー発電の地域的展開—兵庫県東播磨地域の溜池利用— (南埜猛)
36	南和樹	小中一貫教育における学校の立地展開と社会科の内容構成—兵庫県の小中学校と教科書の分析—

期	大学院	日本文化理解教育プログラム
29	向井隆盛	小学校における教科間連携による教材開発—歌川広重画「名所江戸百景」復刻事業を通して—
30	仲村慎二郎	ふるさとに誇りを～身近な地域・郷土の文化財の教材化～岡山県総社市
31	三浦哲史	岩手県・浄法寺漆をめぐる地域と伝統文化
31	飯野卓	言霊から感じる忘れがたき故郷—桑田佳祐をとおして—
32	簗田心一	地域教材を活かした中学校社会科の授業開発—「播磨国風土記」をてがかりとして—
33	桑平英治	地域教材を生かした小学校社会科の授業開発—過去と現在のつながりを感じ、郷土への誇りを育む授業提案—高砂市の竜山石
34	宇田川順子	近隣商店街を教材として地域とのつながりと働くことについて考える—肢体不自由特別支援学校高等部における授業の提案—大阪の大規模アーケード商店街
35	谷口紗耶	富嶽三十六景にみる江戸時代における風景画について

略歴 (吉本剛典)

1953年 (昭和28年)	10月	備後國御調郡土生町に生まれる
1960年 (昭和35年)	4月	因島市立土生小学校入学
1966年 (昭和41年)	4月	因島市立土生中学校入学
1969年 (昭和44年)	4月	広島県立因島高等学校入学
1972年 (昭和47年)	3月	広島県立因島高等学校卒業
1972年 (昭和47年)	4月	広島YMCA予備校～1973年 (昭和48年) 3月
1973年 (昭和48年)	4月	早稲田大学理工学部土木工学科入学
1977年 (昭和52年)	3月	早稲田大学理工学部土木工学科卒業
1977年 (昭和52年)	4月	広島大学文学部史学科地理学専攻学士入学
1978年 (昭和53年)	3月	広島大学文学部史学科地理学専攻退学
1978年 (昭和53年)	4月	広島大学大学院文学研究科博士課程前期入学
1980年 (昭和55年)	3月	広島大学大学院文学研究科博士課程前期修了
1980年 (昭和55年)	4月	広島大学大学院文学研究科博士課程後期入学
1983年 (昭和58年)	3月	広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学
1983年 (昭和58年)	4月	兵庫教育大学助手
1992年 (平成 4年)	4月	兵庫教育大学助教授
2005年 (平成17年)	7月	兵庫教育大学教授
2015年 (平成27年)	5月	兵庫県功労者表彰 (教育功労)
2016年 (平成28年)	9月	加東市感謝状 (都市計画審議会)
2019年 (平成31年)	3月	兵庫教育大学退職

主な学内役職

海外協力教育プログラム運営室長 (ベトナム、フィリピン)
 評価委員会部会長
 国立大学法人兵庫教育大学監査室長
 教員養成スタンダード運営室長
 教職キャリア開発センター長

私の学生時代—揺揺として軽やかに広がり、飄飄として傍らを流れる、か

(兵庫教育大学「学園だより」2002年(平成14年)6月)

自分で言うのも何だが、よく勉強した。

理由は簡単である。なにしろ高校時代、ほとんど、科目によってはまったく勉強していないのだ。大きな声では言えないが、社会科にいたっては、年間通して数時間以上出た科目があったかどうか。ただ、学校は好きで毎日のように行っていた。部活だけやって、そのまま友人宅に泊まり、翌日はそこから登校したり、また別の友人宅に転がり込んだり。学校の勉強よりもやりたいことが沢山あった。

60年代末から70年代初という時代背景もあったと思う。当時の大人たちに混じって、よく議論した。本はよく読んだし、新聞、雑誌も硬派からマンガに至るまで、発刊されているものすべてと目を通していた(誌数が現在に比べて格段に少なかったからできたことでもあるが)。今から思い返すと、規範を一線たりとも踏み外さないことを強く要請される現在とは違って、柔軟と寛容に支えられた復元力に満ちていた。

という訳で、大学時代である。授業をフォローアップするために、自動的に勉強モードになってしまったというか、ならざるをえなかったのだ。とはいえ、一念発起とか、それまでを取り戻して早く同級生たちに追いつこうとか、高い授業料の元を取ってやろうとか、といった切羽詰ったような悲壮感不思議と無かった。ただ単純に、技術を身につけて有為の人間たらんとしていただけである。

1年次に、解析、線形代数、物理・化学の基礎実験、2年次には、方程式、関数、電磁気・計測の実験のほか、測量、材力、水理の一部専門も始まった。3年になると本格的な専門に入り、構造、土質、コンクリート、道路、鉄道、港湾、河川などの講義と演習に加えて、水理実験、測量実習、設計・製図など、実験・実習が週4日もあり、そのレポート作成に追われた。4年次は、より応用的な、発電、水道、都市計画と、あと卒論である。長い螺旋階段を一段ずつ踏みしめるようにして登っている感じだった。

Civil Engineering と呼ばれる分野だったので、人間が地球の表面上に作るものはすべて相手にする。とりわけ、自分ではダム屋になろうと思っていた。したがって、部活は当然、山部である。春夏秋冬、天と地との狭間にあって、たゆたう水と空気がたまらなく心地よかった。

アルバイトはよくやった。多くは生活費と学費のため、残りは山登りの装備と山行費用のためである。時間当たり賃金のいいのは家庭教師と建設現場だったが、町工場や飲食店、テレビ局や広告代理店の方が、いろんな人間がいて面白かった。トレーニング兼の歩荷(ポッカ)は、当時、10キロ1,000円だった。30キロだと走れるが、40キロだと歩きになってしまう。因みに自己最高は58キロである(今では20キロが限界か)。

一番多くやったバイト先は、測量や地質調査のコンサルだと思う。データ処理や図表作成をする内業と、機械や機材を担いで出掛ける外業とがあったが、頭脳労働よりも肉体労働の方が日当が高かった。これらの業種が専門分野に近い(というより、そのものだ)からといって、意識的に選んだ記憶はない。要するに性に合っていたということだろう。

大学卒業後、現在の地理学の分野の門を叩いた。地域調査や地域計画に携わってみたいと思ったからだ。本学に着任して、白井義彦先生の間近に接することができたのは幸運だった。先生は都市・農村地域研究の泰斗で、河川、貯水池、水路などの水利開発と地域対応をはじめとして、多くのことを教示していただいた。

地理学の中でも、人文地理学というと、まったくの方向転換のように見られることもあるが、学生時代から連綿と、自分自身の中では滑らかに連続している。